

なスूपしか与えられなかった。

衛生状態が悪いためシラムがつき、かゆさのために熟睡できず、栄養失調と睡眠不足で数多くの同輩が死んでいった。

少しでも飢えをしのぐため木の葉を食べたり、車から転げ落ちたジャガイモを夜中に拾って食べた。

酷寒の真夜中に、必死の思いでジャガイモを拾い、氷を溶かすために飯ごうで煮たところ、馬糞だったという笑うに笑えない話がある。

帰国が許されたときは、これ以上働くと死んでしまうというところまで体が衰弱していた。

体重は四八キロで、あばら骨が見え、足首からももまでが同じ太さだった。

貨物船で帰国した。

## シベリア抑留記

熊本県 家入 壯介

ハルピンにて武装解除

私の軍隊生活は、昭和十八（一九四三）年十月十五日、熊本工兵第六連隊に入隊した日から始まった。そして直ちに、北滿のハイラルの関東軍工兵第一一九連隊に派遣され、そこで初年兵の基礎教育をうけたのち、昭和二十年七月一日、甲種幹部候補生としてチチハルの関東軍工兵幹部教育隊に入隊した。

教育隊では、滿州、朝鮮、中国の各部隊から集められた約百三十人の候補生が、工兵の幹部将校となるため、毎日厳しい訓練が続けられた。

昭和二十年八月九日ソ連軍が滿州に侵入した日は、ことのほか炎熱の日であった。私達はフルルギの嫩江において鉄舟をつかった架橋の訓練中であつた。午後の訓練が始まって間もないころ、浜

口中隊長が連絡にこられ、「本日未明ソ連軍が、満州各地に侵入して、戦闘状態に入った。演習を中止して直ちに帰隊せよ」との命令であった。部隊に帰ると我々教育隊は直ちに、チチハルの第四軍司令部の直轄部隊となり、神前小隊（第一区隊）、竹脇小隊（第二区隊）には、各一丁の重機関銃と、各人に小銃弾、手榴弾が配られ、軍服、手回品等完全な戦闘装備で身を固めた。

ソ連侵入と同時に、関東軍司令部は通化に移動、そして我々も第四軍司令部と共に、ハルピンに移動した。

この頃、沖縄は占領され、広島、長崎に原子爆弾が落とされ、米英軍の本土上陸も時間の問題となっていた。

八月十五日、ハルピン駅構内の貨車のなかで待機中、中隊長より敗戦の玉音放送があったことを知らされた。

私達は、ソ連との戦争状態に入ったと同時に、かねてより覚悟していた通り、いよいよ祖国のた

めに一身を捧げるときがきたと、戦友と滅死奉公を誓い合い、満蒙の地に骨を埋める覚悟を決めていた。

しかし日本から遠く離れた北満にあつて、私達は祖国の危機状態を深く感ずることはなかった。またソ連兵の姿を見ることもなく、一発の銃弾を発することもなく、敗戦になったと言っても全く納得のいかぬことであつた。

八月十八日、ソ連軍がハルピンに侵入して、我々は競馬場にて武装解除された。ソ連兵の前に、命より大切と言われた、天皇陛下の菊の御紋章がついた銃剣を投げ出したとき、初めて敗戦の実感を味わつた。

#### シベリア抑留

それより、ソ連軍の監視下に置かれ、八月下旬に海林の収容所に集められた。十一月下旬には千人の作業大隊に編成され、帰国させるとだまされながら、シベリアに送られた。そして満州の北に

ある極東シベリアの、ホルモリー地区にある二一七捕虜収容所に収容された。

私達の第一五〇作業大隊は、大隊長に砲兵幹部教育隊の小路少佐、本部長に工兵幹部教育隊の浜口大尉、そして中隊、小隊と、旧軍隊の組織を踏襲した姿で入ソした。階級章もつけたままで、私達候補生は軍曹の襟章をつけていた。翌二十一年の正月は、東方遙拝、君が代斉唱など軍隊の時の儀式で新年を迎えた。

しかしこれが軍隊としての最後の行事となった。その後、帰国の夢破れ、将来生還の望みも分からぬまま、零下四〇度の極寒と、伐採、鉄道工事など、ノルマを強制された重労働の日々が続いた。

二十一年の春になると、若者の間から、この苦境を自分たちの力で、何とか生き抜こうとする情熱と、「日本新聞」をはじめとする、ソ連指導による共産主義の思想教育が相まって、民主化の運動が盛んになり、天皇制、階級制の打破を叫びながら、自らの手で階級章もはずした。ここに二一七

捕虜収容所内における軍隊の階級組織は崩れた。

しかし私達は、ハルピンで武装解除したときも、海林で作業大隊に編成されたときも、「日本軍隊は解散した、我々は軍人ではなくなった」と、部隊長や上官から言われたことはなかった。

関東軍はシベリアの荒野の中で自然消滅した。民主運動が盛んになるに従い、選挙による民主教育が発足した。この時、委員長には工兵幹部教育隊の北村忠一氏が選ばれ、私は作業部長兼機関誌部長に選ばれた。

二十三年には、大隊長、小隊長、分隊長の旧陸軍組織は、団長、班長と团组织となり、団長には同じく教育隊の佐藤泰示氏が指名された。そして収容所の管理、運営は日本人の民主管理の傾向が強くなった。

その頃には零下四〇度の極寒にも慣れ、食料も国際規定の捕虜の定量が配給されるようになった。ソ連の国家も、収容所の生活にもわずかながらゆとりがでてきた。ノルマを一〇〇%遂行して給料

を貰う者も多くなり、収容所内にマガジン(売店)ができ、映画、演劇などの文化活動も盛んになり、食堂では日ソ合同のダンスパーティーも開かれた。私が帰国したのは、抑留生活も安定期を迎えようとしていた、昭和二十四年十一月一日の信濃丸であった。

## シベリア抑留

青森県 竹内 大

### ①敗戦の影を引きずって

思いもかけぬ「敗戦」の報を告げられた私達の心理的打撃は誠に大きかった。混沌と動揺の中で明確な命令も与えられなかったが、一大変事という事態なので命令も出ないのだろうと思いつ、事の推移を見守ってひたすら待つ以外に方法がなかった。

今まで、殆ど、「戦況」を知らされることもなかったが、まさかこれほどまでに状況が悪化していることも知らず、ひたすら訓練に励んでいた私達にとっては悔しさと無念の思いが胸中を去来するだけだった。

この日から敗者としてのみじめな、孤独な影を引きずりながら、帰国の当てもない長いみちのりの第一歩を踏み出すこととなった。